

## 北向の手腕 (阪野甲子)

[おすすめしたい本：市古貞次『御伽草子』の中の『あきみち』]

今年度はNHKラジオの古典講読に合わせてお伽草子ときを読み進めている。昨年度の宇治拾遺物語と比較すると、長めで物語性が強く心理描写も詳しくて読み応えがある。

ラジオ講座では渋川版二十三編以外にも「おようあまの尼」「弥兵衛やひょうえねずみ鼠」「天稚彦あまわかひこ草子」「毘沙門びしゃもんの本地ほんじ」と読まれていくので、各出版社の古典全集本でそれらを探すうちに「あきみち」に出合った。これが滅法面白いのである。大悪党の金山八郎左衛門の用心深さの程が微ほどに入り細びを穿いつように巧さいみに表現うがされていて、意表を突かれっぱなしであった。実際に経験しなければ、こうまで子細に記述することは不可能ではないかとさえ思えてくる。だから経験を積んだ大人の読者をも充分魅了し得る作品となっているのだ。

八郎左衛門は手下を五十人ほど動かして夜盗やとうを繰り返して、有徳うとくの人(大金持ち)になっている。その八郎やかたに館を襲われ父を殺害された秋道あきみちは、自分の妻の美しいきたむき北向を遊女あだうに仕立ててまで八郎の元へと送り込む。そして八郎の棲家すみかを突き止め、待ち伏せて仇討ちをしようと企たくらんだ。しかし、八郎の用心深い数々の振舞いに北向はつけ入る隙を見出せず、ほんの数日で仇討ちのつもりが一年もかかる。北向さくが策あざむをこらして八郎を欺こうとする場面はスリル満点である。そのストーリー展開を是非原文で味わってもらいたい。

私は若い頃、英文でも古文でも一字一句の意味をつかまないと全文を理解できなかった。それが四十歳頃からは英文が、六十歳頃からは古文が、いずれもさほど細部に拘泥しなくても大意をつかめるようになってきた。大抵はどこかで読んだことのある文意だからだろうと思われる。「あきみち」の場合は、徒然草第三十八段の「財多たからおほければ身を守るに貧まどし。害を買ひ累わづらひを招く仲立ちなり。」という文言もんごんが思い浮かぶ。大悪党も恨みを感じた時点で並外れた身辺警護を余儀なくされる。仇討ちを企てなくとも既に天罰は下りているのだ。